

I P M実践指標モデル（わさび）

分類	管理項目		管理のポイント	点数	チェック欄			
					昨年度の 実施状況	今年度の 実施目標	今年度の 実施状況	
予 防	ほ場内、周辺の除草（育苗ほ・本田）		病害虫の発生源となるほ場内やほ場周辺の雑草を除去する。	1				
	無病苗の生産（育苗ほ）（必）		実生苗生産は種子消毒をし、無菌培土でのセルトレイ育苗を実施する。	2				
	育苗施設内の湿度管理（育苗ほ）		病害の発生を予防するため、施設内が過湿にならないように湿度管理を適切に行う。	1				
	作土洗い（本田）（必）		土壌病原菌や水生害虫の密度を低下させるために、作土洗いを行う。	1				
	汚水の排水経路の確保（本田）（必）		収穫や作土洗いの際は汚水の排水経路を確保し、下流わさび田への土壌病害の蔓延や水生害虫の流入を防止する。	2				
	健全苗の定植（本田） （必）	全般	定植苗は病害虫の発生・寄生がない健全な苗を使用する。	2				
		実生苗	根こぶ病の感染苗の持込を防止するため、無菌培土を使用したセルトレイ苗を用いる。	2				
		分根苗	墨入病、軟腐病、輪腐病、根こぶ病が多発したわさび田の分けつは使用しない。	2				
	用水の管理（本田）		軟腐病の発生を未然に防ぐため、適切な水深を保ち水流が停滞しないよう用水の管理を行う。	1				
	収穫残さの処理（育苗ほ・本田）		収穫後の残渣は病害虫の発生源となるので、速やかに持ち出し、適切に処分する。また、作土に残った根は丁寧に取り除き処分する。	1				
判 断	病害虫の観察（育苗ほ・本田）（必）		病害虫の発生状況を確認し、防除適期を逃さない。	1				
防 除	生 防 除 的	生物農薬の使用（育苗ほ・本田）		アオムシ、コナガの防除にBT剤を使用する。	1			
		防虫ネットの設置 （必）	育苗ほ	育苗施設や育苗ほ場は、防虫ネットや寒冷紗で被覆し、害虫の飛来や産卵を防ぐ。	2			
	本田		4月～8月に定植する場合は、防虫ネットで被覆し、害虫の飛来や産卵を防ぐ。	2				
	物 理 的 防 除	パイプ栽培の実施（本田）		軟腐病や水生害虫の被害が多いわさび田では、パイプ栽培を行う。	1			
		地床育苗の土壌病害・センチュウ対策（育苗ほ）		太陽熱消毒、熱水土壌消毒、散水蒸気消毒などを行う。	1			
		病害の発生した株の処理（育苗ほ・本田）		土壌病害の発生が認められた場合は、早期に抜き取ってほ場外に出し、適切に処分する。	1			
		農薬の使用全般（共通）（必）		十分な薬効が得られる範囲で、最小の使用量となる最適な散布方法を検討した上で、使用量・散布方法を決定する（薬剤散布後の残液が出ないように薬液を調整する）。	1			
	化 学 的 防 除	薬剤の選択	育苗ほ	薬剤抵抗性を回避するために、化学合成農薬を使用する場合には、特定の成分のみを繰り返し使用しない。また、農薬工業会が提供している作用機作による農薬の分類（IRAC、FRAC）を確認する。	1			
			本田（必）	水系環境に影響が少ない天然物由来の農薬を選択し使用する。	1			
				化学合成農薬を本田で使用する場合は、静岡県わさび農業安全使用協議会から「わさび農業使用許可証」の交付を受け、同協議会が策定した「わさび農業安全使用指針」及び「わさび農業散布細則」を厳守し使用する。	1			
		定植苗の土落とし（本田）（必）		育苗中に化学合成農薬を使用した苗は、農薬の本田への持込を防ぐため、十分に土を落としてから定植する。	1			
		散布方法（育苗ほ・本田）		農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。散布は早朝か夕方無～弱風時を選んで行う。	1			
		散布後の処理（育苗ほ・本田）		散布器具、タンク等の洗浄を十分に行い、残液やタンクの洗浄水は適切に処理し、河川などに流入しないようにする。	1			
そ 他	作業日誌（育苗ほ・本田）（必）		各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、使用した農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のI P Mに係わる栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1				
	研修会等への参加（育苗ほ・本田）		県や農業協同組合が開催するI P M研修会や防除研修会等に参加する。また、研修会等の内容は、家族や作業者等へ周知し、情報共有する。	1				
				合計点数				
				評価結果				

*（必）と記述している管理項目については、必ず管理項目として設定しチェックする。